

第298回くらしの植物苑観察会 令和6年1月27日(土)

「くらしの中に息づく植物—衣類にまつわる植物—」

天野 誠 氏 千葉県立中央博物館 上席研究員

人々の暮らしは、衣食住を基本として成り立ってきた。衣類については、主に布から出来ている。織物と編物に大別できる。織物は、縦糸の間に横糸を通し、機織り機で作るものである。編み物は、手編みにしても機械編みにしても横糸1本の糸から作るものである。織物を作るには、まず糸を作る必要がある。糸の作り方には、紡ぐと績むとの2つの方法がある。紡ぐとは、綿や絹を紡錘にかけて繊維を引き出し糸にすることである。績むとは、細く割いた繊維を捻ったり、結んだりして糸にすることである。

現在、最も身近に存在する植物性繊維は、綿(ワタ)である。ワタはアオイ科の一年性草本で、種子の周りに長い種毛が生えている。インド原産のインドメンとアメリカ原産のリクチメンとカイトウメンがある。糸の作り方は、手摘みした綿花を、綿繰り機にかけて、種子と繊維に分離する。唐弓で綿打ちをする。篠巻(空洞の綿の棒)を作る。篠巻から糸を紡ぎ出して、糸車にかけて、撚りを掛ける。糸を枠にして、米の研ぎ汁で煮て仕上げる。

綿は少なくとも永和年間(南北朝)に、栽培されたという説がある。後に、河内と三河が大産地になった。綿の栽培は、収益が高いものであるが、金肥を必要とし、収穫に多くの人手を必要とする。江戸時代、木綿は重宝されたが、その栽培が困難な所では、他の繊維植物の栽培が継続された。

麻(アサ)は縄文時代から栽培された古い繊維植物である。アサは、インド原産のアサ科の一年性草本である。糸の作り方は、麻を根こそぎ抜き、葉を払って茎のみにする。麻の茎を蒸す。筵に巻いて発酵させて、茎の皮を剥ぐ。表皮を剥ぎ、靱皮のみにする。靱皮(ジンピ)を細く割き、捻りをかけて、端をつなぎ合わせ、糸とする。麻の繊維はさらっとしており、通気性、放湿性に富み、夏の衣料にふさわしい。庶民の衣類として重宝された。

苧(カラムシ)は、奈良時代には利用されていた繊維植物である。カラムシは、日本にも自生する多年性草本である。糸を作るには、まず茎を鎌で刈り取り、葉を手で除く。茎の中央部を捻り折り、隙間に親指を入れて、左右に引いて、表皮を取る。30分ほど水に浸け、ミミガイで外側の不純物をこそげ取り、陰干しする。糸績みは、皮を小指の爪先に掛けて、細かく裂いて、撚り合わせていく。糸車にかけて撚りを掛け、小竹に巻く。緋にする場合には、糸に防染をして、整経する。苧は麻よりも細い糸ができ、しなやかな織物ができる。現在でも、越後上布、奈良晒し、宮古上布など、特産品として流通している。

亜麻は、西アジアからヨーロッパにかけて、栽培されていた繊維植物である。アマはアマ科の一年性植物である。種子からはアマニ油が取れる。糸にするには、収穫したアマを、茎を分けて、1週間から10日水につける。乾かして、金槌で叩き、繊維を取り出す。さらに木で出来た機械にかけて繊維を細かくする。コームで梳かし、余計な部分を取り、さらに繊維を細かくする。スピンドルに捻りをかけながら巻き取り、糸を紡ぐ。糸を枷に取り、緩く巻いて、重曹を入れた水で煮る。縮まないように重石をかけて、糸を乾燥させる。アマは毛織物に比べ薄くしなやかで、シャツやテーブルクロスなどに用られる。

楮(コウゾ)は、クワ科の低木で、カジノキとヒメコウゾの雑種で、栽培植物である。

糸を作るには、コウゾの枝を切り、こしきで蒸す。皮を剥ぎ、灰汁で煮る。皮に糊殻をまぶし、手で揉み、脚で踏み、木槌で叩いて、外皮を取りやすくする。川で、外皮が取れるまで洗う。乾燥させた皮は、

2～3mmに割き、つなぎ目を2つに割き、縄をなうように撚る。糸は総車（カセグルマ）にかけ、総（カセ）にする。灰汁で煮て、棒で捻って絞る。糸に米糠をまぶし、重石を使って、引き伸ばしながら乾燥させる。楮からできた布は、太布（タフ）と呼ぶ。徳島県木頭村では、他に衣料となる植物はなく、この布が残った。また、楮は和紙の原料でもある。和紙で作った衣料を紙子（カミコ）という。

藤（フジ）は、マメ科の藤本で、自生植物である。糸を作るには、直径1cmぐらいのフジを1尋（ヒロ）に切って、金槌で叩き、皮を剥がれやすくする。片方を足で押さえ、手で一気に皮を剥ぐ。鎌で傷を付け、左右に鬼皮を剥ぎ取っていく。靱皮（ケンピ）をアラソという。アラソを手で細かく割き、物置で保管する。冬、灰汁炊きをする。アラソを川で洗って、こきばしでしごく。鍋に湯を沸かして、米糠を入れて軽く揉み、乾燥させる。アラソを細かく割き、捻りながらつなく。経糸が藤で、緯糸が木綿の織物で、山着を作った。

芭蕉布は、栽培されたリュウキュウイトバショウから作る。外側の古い表皮を取り除き、根の部分を上にして、4cm幅に切り込みを入れて外から一枚ずつ剥いていく（口割）。口割りした原皮は先の方を足で押さえ、両手で表側と裏側の2枚に分ける（芋剥ぎ）。表側を糸にする。芋は灰汁で、20、30分煮る。時々、上下を返す。煮た芋はよく水洗いする。重石を載せて水を切る。芋を2つか3つに裂き、左手の人差し指に巻き、竹ばさみで2、3回しごく。芋は、日陰で乾燥させる。乾燥した芋は、根元からから穂型（チング）に巻く。チングを30分ほど浸して軽く絞る。右手に小刀を持ち、根元の方から爪で割いていく。細かく割いた芋は、はた結びでしっかり結び、糸端はなるべく短く切る。緯糸は、杼（ヒ）の中に入る程度に手で管巻きにする。糸に湿りを与え、経糸に4、5回糸車で、撚りを掛ける。緯糸でも緋糸では、3回ぐらい甘撚りをする。模様織をするために、緋糸を防染して染める。茶褐色に染めるには、シャリンバイ（バラ科）を使う。藍に染めるには、リュウキュウアイ（キツネノマゴ科）を使う。

葛（クズ）は、マメ科の多年性草本で、自生植物である。太い葛を2尋ぐらいに鎌で刈り取る。皮は根元の方から剥ぐ。葉の付いている所は、歯で噛むように持ち、両手で剥いだ。湯を沸かし、皮の束を、木灰を加えて、半日ほどゆでる。川の中で、指でしごいて、外皮を剥がす。細かく割いて、はた結びで、糸を繋ぐ。糸車で、撚りを掛ける。普段着は経糸、緯糸とも葛が用いられた。例に挙げた甕島では現在では作られていない。

しな（オオバボダイジュ）の糸を作るには、梅雨時、木を伐採し、皮を剥ぐ。剥いだ皮は、木灰で煮て、糠に漬ける。薄く剥がして、細かく割いて、撚りを掛けて繋ぐ。糸車で撚りを掛ける。現在では帯などに加工して販売されている。

参考文献：草木布Ⅱ 竹内淳子（1995） 法政大学出版社

.....

次回予告 第299回くらしの植物苑観察会 令和6年2月15日（木）

※平日開催となります。ご注意ください。

「植物苑の虫のいろいろ」

川村 清志（民俗研究系 准教授）

13：30～15：30 　くらしの植物苑 東屋 申込不要